

# 子どもが「～したい」という思いや願いをもって主体的に探究活動に取り組む姿を目指した単元づくり

— 動機付けと課題設定の在り方に着目して —

総合的な学習の時間研究会議

研究員 長澤 拓也 (川崎市立橘小学校) 井上 卓 (川崎市立麻生中学校)  
 田中 彰真 (川崎市立田島中学校) 平原 典幸 (川崎市立枡形中学校)  
 指導主事 山城 祥二

## I 主題設定の理由

令和5年度から新たに実施された川崎市学習状況調査<sup>1</sup>においては、総合的な学習の時間についての好感度の調査で、図1のような結果が得られた。これを見ると、生徒の好感度はどの学年においても約7割と比較的高い数値を示している。さらに、特筆すべきは、A層とD層を比較したとき、中学2年生、3年生においてほとんど大きな差がないことである。中学校1年生においてもA層からC層はほとんど差がないことがわかる。これは、総合的な学習の時間が、誰もが主体的に学ぶことができる学習であることを示唆している。

では、本市では、生徒は主体的に探究活動に取り組むことができているのだろうか。学習指導要領解説(平成29年告示)総合的な学習の時間編(以下、解説)では、その目標において、「実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。」「探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら積極的に社会に参画しようとする態度を養う。」とある。つまり、自ら課題意識や目的意識をもつことで、活動が探究的になり、主体的・協働的に取り組むようになるということである。しかし、本市における各中学校の総合的な学習の時間の全体計画を見ると、多くの学校で総合的な学習の時間が、生徒が自ら課題意識や目的意識をもって主体的に取り組めていない状況が見受けられる。その内容は、例えば、修学旅行に行くので事前学習で日本文化を調べる、実際に現地へ行く、そこで分かったことをまとめてプレゼンや新聞等で発表するといったように形骸化されているケースがあり、生徒の「調べたい」「伝えたい」という思いや願いからではなく、教師の指示によって活動が進むような内容となっていることが課題となっている。

一方で、本研究会議が中学校の教員向けに行ったアンケートの結果では、「総合的な学習の時間の単元づくりにおいて意識すべきことは何か」という質問において、「子どもが探究的に活動できること」を挙げた回答は91.4%と高い数値となっており、探究的な学習となる単元をつくることを意識していることが分かる。(図2)。このことか

### 総合的な学習の時間に関する調査結果

学習に関する意識調査

質問事項	肯定的な回答	4層分析			
		A層	B層	C層	D層
総合に対する好感度	70.2	73.5	71.9	71.0	64.5
中1	70.2	73.5	71.9	71.0	64.5
中2	69.8	69.5	71.2	70.0	68.7
中3	71.6	70.4	72.3	74.5	69.2

図1 令和5年度川崎市学習状況調査をもとに作成

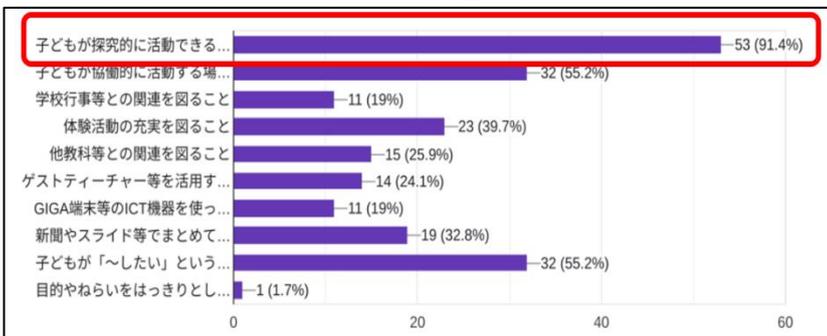


図2 「総合的な学習の時間における教員の意識調査」をもとに作成

<sup>1</sup> 川崎市学習状況調査 本市において令和5年度から実施している学習状況調査。児童生徒は、学習の取組を振り返り、課題を的確に把握し、学習改善に生かすことを、学校は、学校教育目標等で示した資質・能力の育成に向けて、調査結果を分析し、個に応じた指導や学校(学年)での授業改善、教育課程編成等に生かすことを目的に実施している。分析方法として、受検者の上位25%ずつをA～Dの4層に分けて正答率を見ることができる。

ら、教師自身が探究的な学習とはどのような学習かを捉えていないまま、単元をつくっている可能性が考えられる。

また、「総合的な学習の時間を進めるにあたって難しさを感じますか」という質問については、89.6%が「難しい」「どちらかといえば難しい」と回答している(図3)。その理由としては、「教材開発に時間がかかる」「学校のカリキュラムが決まっていて新たな単元開発が難しい」「生徒の調べ学習が結局インターネットの情報を書き写すだけになってしまう」などが挙げられた。その中で最も多かったのは、「単元の目標設定やゴールの姿がイメージできない」「課題の設定をどうすればよいかわからない」という声であった。

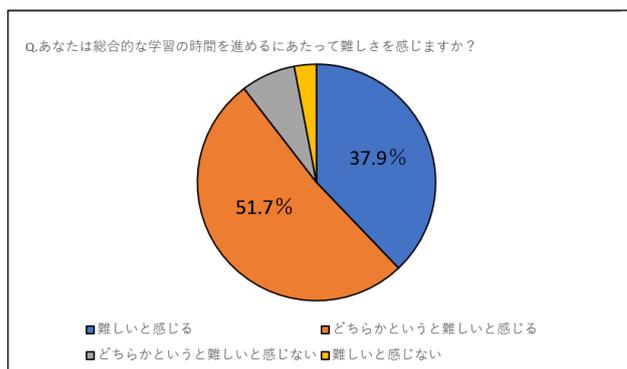


図3 「総合的な学習の時間における教員の意識調査」をもとに作成

これらのことから、教員は探究的な学習になる単元をつくる必要感をもっているが、単元づくりの方法がわからないことや学校にあるカリキュラムを変更できないという固定概念があることで、既存のカリキュラム通りに学習を進めているという現状があることが見えてきた。

これらの本市での現状を鑑み、本研究会議では、「子どもが『～したい』という思いや願いをもって主体的に探究活動に取り組む姿を目指した単元づくり」というテーマを設定した。中学校の総合的な学習の時間に焦点を当て、学校行事等と関連した既存のカリキュラムを大きく変更することなく、学校行事等との関連を効果的に生かしながら、生徒が単元を通して目的意識をもった課題を設定し、自ら「～したい」という思いや願いをもって主体的に探究活動に取り組む姿を目指した単元づくりについて研究していくこととした。

## II 研究の内容

### 1 研究の視点

#### (1) 本研究会議における「主体的に探究活動に取り組む姿」の捉え

研究を進めるにあたって、主体的に探究活動に取り組む姿とはどのような姿かを話し合った。解説では、「主体的な学び」の視点について、「主体的な学びとは、学習に積極的に取り組ませるだけでなく、学習後に自らの学びの成果や過程を振り返ることを通して、次の学びに主体的に取り組む態度を育む学びである。」と記されている。また、そのような学びを進めていくためには、「生徒が自分の事として課題を設定し、主体的な学びを進めていくようにするために、実社会や実生活の問題を取り上げること」「学習活動の見通しを明らかにし、学習活動のゴールとそこに至るまでの道筋を鮮明に描くことができるような学習活動の設定を行うこと」が大切であると示されている。これらのことを参考にしながら、本研究会議における「主体的に探究活動に取り組む姿」の定義を表1のとおりとした。

表1 本研究会議における「主体的に探究活動に取り組む姿」の定義

探究活動とは、生徒がある目的をもって、そこに向かって連続的・発展的に課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現という探究のプロセスを行うことである。そのような探究活動に主体的に取り組む姿とは、生徒が目的を明確にもち、それに向かって「～したい」という思いや願いをもって自らの活動に見通しをもち進んで活動に取り組もうとする姿である。

この定義から、本研究会議では、生徒が目的を明確にもって探究活動に取り組めるようにすること、「～したい」という思いや願いをもつこと、自らの活動に見通しをもつことを意識した手立てについて考えた。

## (2) 動機付けと課題設定の在り方について

解説における動機付けについての記載は、教材（学習材）についての項目において、「教材とは、生徒の学習を動機付け、方向付け、支える学習の素材のこと」と記されている。つまり、どのような教材を扱うかという点が、生徒の動機付けにつながる重要な視点であると捉えることができる。また、課題の設定の工夫については、「事前に生徒の発達や興味・関心を適切に把握し、これまでの生徒の考えとの『ずれ』や『隔たり』を感じさせたり、対象への『憧れ』や『可能性』を感じさせたりする工夫をしなければならず」と記されており、その際の教師の働きかけとして、「人、社会、自然に直接関わる体験活動においても、学習対象との関わり方や出会わせ方などを、教師が工夫する必要がある」と示されている。さらに、指導計画の在り方においては、「学習活動や生徒の意識が、連続し発展していくように配列することが大切である」と記されている。これらのことを踏まえると、教師が単元の見通しをもち、その上で生徒が主体的になるような課題設定となるよう工夫すること、そして単元を進める上でふさわしい学習材を十分に吟味し、動機付けとなる学習材との出会わせ方を考えることが、表1の姿を目指す上で重要であると考えた。そこで、本研究会議では、生徒が「～したい」という思いや願いをもてるような動機付け（学習材との出会わせ方）と課題設定場面の工夫をすることで、主体的に探究活動に取り組む姿を目指すこととした。

## (3) 生徒が主体的に探究活動に取り組むための3つの手立て

(1)(2)を踏まえて、生徒が主体的に探究活動に取り組む姿につながる単元づくりについて考えた。総合的な学習の時間の単元づくりにおいては、国立教育政策研究所から令和4年3月に発行されている「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」において、単元計画作成の手順について、生徒の興味・関心、教師の意図、学習材の特性の3つを踏まえて、単元を中心となる活動を思い描き、そこから探究的な学習として単元が展開するイメージを思い描くと示されている。これを参考に、前述した学習材との出会わせ方と課題設定場面の工夫を踏まえて表2のとおり手立てを考えた。

表2 主体的に探究活動に取り組む姿につながる教師の手立て

- |                                                                               |
|-------------------------------------------------------------------------------|
| ア 単元を中心となる活動や単元のゴールの姿を見通して、課題設定につながる動機付けの工夫を行う【動機付けの工夫】                       |
| イ 生徒がその活動に意味を見出し、目的意識をもって取り組もうとする課題になるよう課題設定場면을工夫する【課題設定場面の工夫】                |
| ウ 課題の解決に向けて効果的に活用できるよう、学校行事等の体験活動や外部講師等の出会いを単元の中に適切に位置付ける【体験活動や外部講師の効果的な位置付け】 |

以下、この手立てがどのように生徒の変容につながったかを実際の授業を振り返りながら述べていく。

## 2 研究の実際（授業実践）

### (1) A中学校 第2学年

単元名：「私たちの住んでいるまちの旅行雑誌る・ぶ・る～調べる・学ぶ・見る～をつくろう」

探究課題：自分たちの住むまちのよさとそれを発信する方法

#### ①本単元の単元目標

自分たちの住んでいるまちの魅力を見付け地域版の旅行雑誌を作成する活動を通して、自分たちの住んでいるまちの魅力に気付き、まちの魅力について東京と比較しながら考えるとともに、その魅力を積極的に発信しようとするができるようにする。

#### ②具体的な教師の手立て

##### ア：動機付けの工夫

本単元では、「地域版の旅行雑誌づくり」という中心となる活動を思い描き、単元を構成した。旅行

雑誌づくりという活動への興味・関心を高めるために、周年行事に向けて地域のよさを発信する地域版の旅行雑誌をつくってほしいということを教頭先生から生徒たちへ依頼した。そこで、教師が編集長に扮して市販の旅行雑誌をモデルに示した。

**イ：課題設定場面の工夫**

地域の魅力を焦点化して調べる活動につながるように、教師から各グループで特集ページを作成するという活動を提案した。その際、東京校外学習という学校行事があり、他都市と比較する機会があることを伝えた。また、特集ページに向けて生徒たちが小学校までに学んできた地域の特性について話し合ったり、まちの魅力になりそうなところとその比較対象についてじっくり考えたりして、見通しをもって学習活動を計画する時間を設けた。

**ウ：体験活動や外部講師等の効果的な位置付け**

自分たちの特集ページのテーマをもとに、事前に十分な調べ学習を行った。比較対象となる東京の場所とアピールしたいまちの魅力を、いくつかの視点で調べた。調べる中で、生徒は、「地域の魅力をより深く知るために、東京と比較する」という明確な目的をもって校外学習に臨んでいた。このような明確な目的意識をもって校外学習を迎えることができるよう、年間のカリキュラ

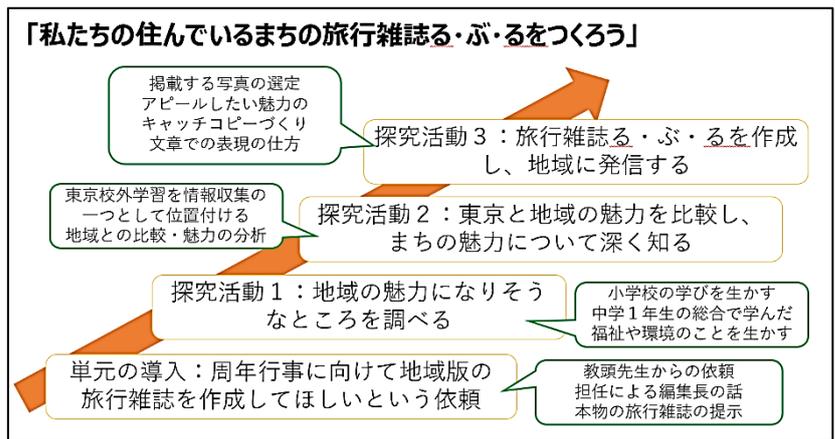


図4 研究員が作成した本単元の単元構想図

ムを見直し、単元の見通しをもって適切な時期に校外学習が位置付くように単元計画を立てた (図4)。

**③教師が講じた手立てによる生徒の姿の考察**

**ア：動機付けの工夫**

学校から周年行事に向けた依頼を受けたことと、編集長に扮した教師が旅行雑誌のモデルを提示したことで、生徒が「自分たちもつくってみたい」「面白いものが作れるのではないか」という憧れや可能性を感じ、自分たちのオリジナルの旅行雑誌をつくりたいという思いや願いをもつことにつながった。旅行雑誌作成のために、これからどんな活動が必要かを話し合うと、地域ならではの魅力を見付けること、その魅力を深く知ること、実際の場所に行ってみることなどの必要感が出てきた。その際に、旅行雑誌の名前についての話し合いを関連させ、「る (調べる)・ぶ (学ぶ)・る (見る)」という雑誌名も生徒たちから生み出された。教師の働きかけを工夫することによって、生徒の「やりたい」という思いが生まれ、主体的な活動につながっていく姿が見られた。

**イ：課題設定場面の工夫**

旅行雑誌をつくるという目的が明確になったことで、そのために「地域の魅力をより深く知ることはいできないか」という課題を解決する必要が生まれ、見通しをもって計画する姿が見られた。さらに、特集ページを組むということで、自分たちの住むまちにしかないものを見付けようという意識が高まった。その際に、学区だけではなくもっと広い範囲で魅力を見付け発信したいという思いが生まれ、生徒たちの思いから紹介する範囲を区や市まで広げたいという声があがった。これは、生徒の目的意識と学習の見通しがあったことで、学習計画を調整しようとする姿につながったと捉えることができる。生徒と話し合った結果、範囲を広げることとした。

「坂道」についての特集を計画したグループでは、多摩区の地域の高低差を生かして景色がきれいに見える場所について調べ、その魅力について検討した。より深く魅力を知るために、東京の中で同様の場所がないかを調べ、実際に見ることができるよう校外学習のコースを計画していた。目的意識を明

確にもち、課題解決のための情報収集の一つとして校外学習を活用しようとする姿が見られた。

**ウ：体験活動や外部講師等の効果的な位置付け**

校外学習では、生徒が地域の魅力をより深く知るために東京との比較をするという明確な目的をもって実施することができた。地域の魅力を知るために、自分たちで決めた比較の視点に沿って実際の場所での調査を行った。前述したグループでは、調べてきた情報を整理・分析する中で、そこに訪れる人に違いがあるという点や、有名な映画の聖地といったその場所への価値付けがあるという点、訪れる人への配慮といった点で、自分たちの住むまちの場所にもよさがあるということに気付いていた(図5)。また、比較することによって、自分たちのまちの坂や階段の方が美しい景色が見られるという誇りをもつことにもつながった。これらの分析をもとに、改めてモデルとなる旅行雑誌の特徴を見る時間を設けることで、写真の画角やキャッチコピー、紹介するポイントなど多様な表現の仕方があることに気付き、「地域の魅力をどのように特集ページで表現するか」という新たな課題につながった。

校外学習をしてわかった3つの真実  
 その1『階段が工夫されていた』  
 あまり疲れないように緩やかな階段だったり、どの身長にも合うように手すりにも工夫が施されていた。  
 その2『外国人が多い』  
 有名な映画の聖地だからか、日本人以外にも写真を撮りに来る外国の方もいた。  
 その3『私の地域が1番』  
 映画の聖地にもなっている階段もあるが、生田配水展望広場の景色は、どの階段から見る景色の中でも1番きれいだった

図5 生徒が作成したスライド

**(2) B 中学校 第2学年**

**単元名：「私たちのまちの魅力を再認識して、発信してみんなに知ってもらおう」**

**探究課題：自分たちの住むまちの魅力とその魅力を効果的に発信するための動画づくり**

**①本単元の単元目標**

自分たちのまちの魅力を再確認し、発信する活動を通して、自分たちのまちの魅力について理解し、まちの魅力を多くの人に発信するために、どのような動画をつくるとよいかを考えるとともに、自分たちのまちに愛着をもち、積極的に魅力を発信しようとするができるようにする。

**②具体的な教師の手立て**

**ア：動機付けの工夫**

本単元では、「地域のブランドメッセージ作成とそれをPRする動画づくり」を中心の活動として思い描き、単元を構成した。単元の導入では、川崎市が人口が増え続けているという事実を踏まえて、川崎市の魅力について話し合

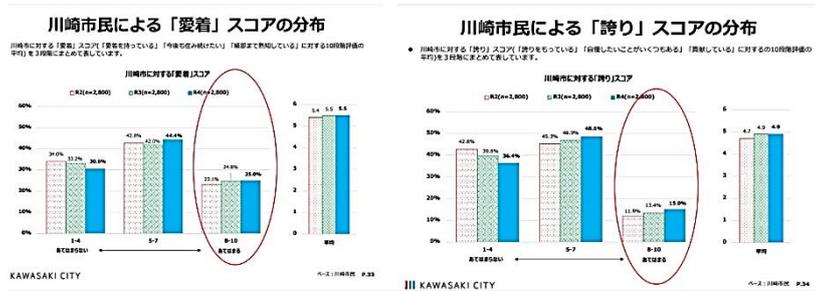


図6 令和4年度川崎市都市イメージ調査結果(川崎市総務企画局シティプロモーション推進室作成)より引用

うと、「たくさんありそう」という言葉が出た一方で、生徒から「便利さ」という魅力しか出てこなかった。さらに、川崎市が取った市民へのアンケート結果を分析した資料(図6)を提示し、川崎市民による「愛着」と「誇り」のスコアが他都市に比べて低いという事実を示した。

**イ：課題設定場面の工夫**

動機付けにおいて地域の魅力をもっとアピールする必要感をもった生徒たちは、「どのようにアピールするとよいか」という課題をもつようになった。そこで、川崎市シティプロモーション推進室作成の副読本「Colors, Future!いろいろって未来!」を活用することで、まちの魅力を発信する方法としてブランドメッセージをつくること、それを動画で発信することで地域の魅力のアピールにつながるのではないかという「可能性」を感じることができるようにした(図7)。



図7 副読本を紹介している様子

ブランドメッセージづくりについ

ては、本単元を実施する前に、職場体験のまとめにおいて、地域で働く方々の思いについて調べたことをブランドメッセージにするという活動を取り入れた。副読本を紹介する際にこの活動について想起することで、地域の魅力を発信する活動においてもブランドメッセージを活用するとよいのではないかとというアイデアが生徒の中から出てきた。

### ウ：体験活動や外部講師等の効果的な位置付け

まちの魅力について調査する際には、自分たちがこれまで体験してきたことを想起しながら調べる活動を行った。その際に、前述した副読本や川崎市のホームページを活用した。校外学習の計画では、川崎市のまちと東京を比較することで、自分たちのまちの魅力に気付くことができるようにした。校外学習については、A 中学校と同様に年間のカリキュラムを見直し、適切な時期に校外学習が位置付くように

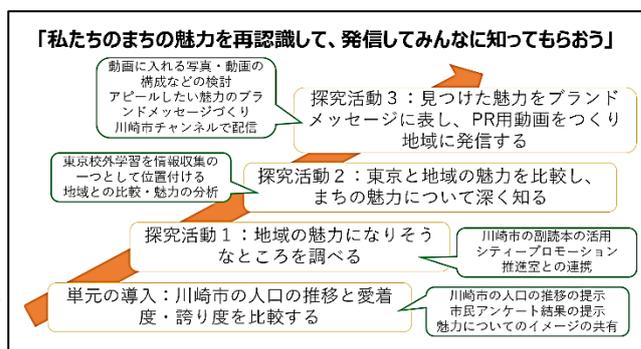


図8 研究員が作成した本単元の単元構想図

に単元計画を立てた(図8)。さらに、動画づくりへの意欲が高まるように、シティープロモーション推進室の方を外部講師として招き、市制100周年記念事業に向けて、川崎駅で動画を放映することやYouTubeの川崎市チャンネルで発信することなどの提案をいただけるよう事前に依頼をした。

### ③教師が講じた手立てによる生徒の姿の考察

#### ア：動機付けの工夫

資料を提示したことで、川崎市の人口が増え続けているが、市民として自分のまちに愛着や誇りがもてずにいるという事実から、生徒たちは「もっとまちに愛着や誇りをもてるようにしたい」という思いや願いが生まれた。さらに、自分たち自身も「便利さ」という点でしか魅力を見出せていないことから、「もっと川崎の魅力を見付けることで、愛着や誇りをもてるようになるのではないか」という課題を設定することにつながった。

#### イ：課題設定場面の工夫

ブランドメッセージと動画を作成するという単元のゴールを設定することで、「魅力を発信するにはどうすればよいか」という単元を貫く課題が生まれた。そこで、魅力を発信するまでの過程として、①まちの魅力を見付ける②東京と比較することで自分たちのまちにしかない魅力を捉える③魅力をアピールするためのブランドメッセージをつくる④ブランドメッセージに合った台詞と映像で動画を作成するという見通しをもって学習計画を立てる姿が見られた。学習計画に沿って活動を進める上で、活動の節目となる場面では振り返りを記入する時間を設け、それを端末で共有できるようにした。活動を振り返ることで、生徒からは「次の時間はこの活動をしたい」「一度情報を整理する必要があるね」といった声があがるようになった。学習の見通しをもち、活動を振り返ることで主体的に探究活動に取り組む姿が見られるようになった。

#### ウ：体験活動や外部講師等の効果的な位置付け

地域の魅力調べでは、副読本や川崎市のホームページを調べ、魅力になりそうなものを付箋で書きだした(図9)。副読本やホームページの川崎ならではの視点で書かれた魅力を知ること、「自分たちのまちにしかない魅力」という視点が生まれ、地域ならではの特産物や歴史的建造物、

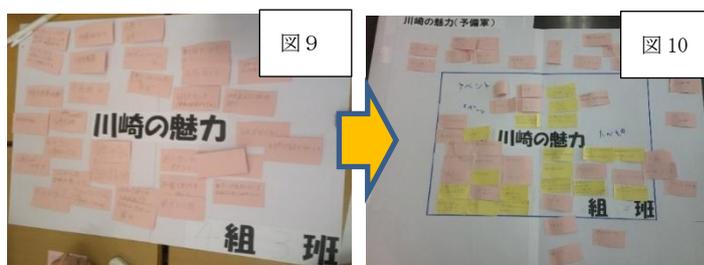


図9・10 生徒が調べた魅力を分類した画用紙

ローカルヒーローや地域に住む人しか知らないグルメなどを調べる生徒の姿が見られるようになった。さらに、校外学習では、「自分たちのまちにしかない魅力を見付ける」という視点で東京のまちと比較をすることにつながった。校外学習後は、集めた情報をさらに付箋で書き出し、特にアピールしたい魅

力を1軍、他のまちにもあるかもしれない魅力を2軍として画用紙に分類し、整理・分析した(図10)。東京スカイツリーと川崎マリエンを比較したグループでは、整理・分析することを通して、川崎マリエンには美しい景色だけでなく、川崎の海の玄関口としての魅力があることに気づき、動画づくりで表現する際には、「海と市民の架け橋」というブランドメッセージを付けていた。校外学習で集めた情報と事前に調べた地域の魅力を比較することで、魅力の捉えが更新していく様子が見られた。

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 研究から見たこと

本研究会議では、表1で示した子どもの姿を目指して、表2に整理した手立てをもとに、A中学校では「地域版の旅行雑誌づくり」、B中学校では「地域のブランドメッセージ作成とそれをPRする動画づくり」を中心となる活動として、単元づくりを行った。その成果として、中心となる活動を見通して単元を構成し、動機付けと課題設定場面を工夫することによって、生徒一人一人が目的意識をもった課題を設定し、必要感をもって情報を収集したり、目的に向かって集めた情報を整理・分析したりする姿を見取ることができた。

動機付けについては、学習材との出会わせ方を工夫することで、学校行事等に行くこと自体をゴールとするのではなく、生徒が学校や地域のために「～したい」という思いや願いをもち、学習の見通しをもち、自己の学習を調整する主体的な姿が見られるようになることが分かった。

課題設定場面については、教師が適切な働きかけをすることで、生徒が目的をもって、そこに向かって連続的・発展的に探究のプロセスを進めていくことができることが分かった。旅行雑誌づくりや魅力を発信するブランドメッセージと動画づくりという中心となる活動において、どのような活動が展開され、どのような力を育むことが期待できるかを十分に想定することで、教師はその活動につながることを意識して課題設定場面を設定することができる。

学校行事等を効果的に活用することについては、体験活動や外部講師を単元に位置付ける際に、課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現のどの場面に位置付けるかを見通しておく必要があることが分かった。検証授業においては、校外学習を情報収集の場面と捉え、生徒が「調べたい」「地域と比較したい」という思いや願いをもったタイミングで校外学習を体験活動として位置付けた。また、B中学校では、動画作成への意欲を高めるために、外部講師との連携を図った。いずれにしても、教師がその活動の目的を明確にもって単元に位置付けることが大切である。

また、もう一つの成果として、本研究においては、単元づくりについて研究する中で、生徒だけではなく教師自身にも変容が見られた。研究員は、はじめは学校行事等をどのように効果的に活用するかということを考え、行事ありきで単元を構成する様子が見られた。しかし、生徒の思いや願いを見取り、生徒が主体的になっていくに連れて、外部講師や他の体験活動を入れた方がよいのではないかと、もっとじっくり話し合ったりまとめたりする時間が必要ではないかと、という生徒の思考に合わせた手立てが次々と浮かんできた様子だった。単元の見通しをもつことで、教師自身も主体的に単元づくりをする姿につながっていた。

以上のことから、研究を通して明らかになった主体的に探究活動に取り組む姿を目指した単元づくりのポイントについて、表3に整理した。

表3 主体的に探究活動に取り組む姿を目指した単元づくりのポイントについて

- ・教師が単元を中心となる活動を思い描き、単元のゴールにおける生徒の姿を明確にし、単元の見通しをもって単元を構成する。
- ・生徒が「～したい」という思いが生まれるような動機付けと課題設定の工夫をする。
- ・生徒の思いや思考の流れに合わせて、体験活動や外部講師との出会いを適切に単元に位置付ける。

## 2 今後の課題

研究を振り返った際に課題として挙げられたのは、課題設定場面における教師の働きかけと生徒の主体的な活動とのバランスである。教師の意図を重視し過ぎると、生徒は教師の求める答えを見付けるような活動になってしまう。一方で、生徒の主体性を重視し過ぎると、単元の目標から逸れた活動に進んでしまう恐れがある。解説では、「生徒の主体性を重視する」としながら、そこには「どのような体験活動を仕組み、どのような話し合いを行い、どのように考えを整理し、どのようにして表現し発信していくかなどは、まさに教師の指導性にかかる部分であり、生徒の学習を活性化させ、発展させるためには欠かせない」とある。そして、「こうした教師の指導性と生徒の自発性・能動性のバランスを保ち、それぞれを適切に位置付けることが豊かで質の高い総合的な学習の時間を生み出すことにつながる」と記されている。2・(2)における授業実践では、課題設定場面においてブランドメッセージづくりで魅力をアピールしようというアイデアが出たが、それを生かした動画づくりというアイデアについては、シティープロモーション推進室との連携において教師が提案している。ブランドメッセージの発信であれば、動画のほか、ポスター、チラシ、パンフレットなど、様々な発信方法が考えられる。発信方法についても生徒が伝えたい魅力や伝える対象に応じて自由に選択して取り組むことで、さらに主体的な活動につながることも考えられた。生徒が主体性を発揮する場面なのか、教師の指導性が必要な場面なのか、見極めながら働きかけることが大切である。

もう一つの課題は、ゴールまでの道筋を見通した課題設定である。2・(1)における授業実践では、地域版の旅行雑誌をつくるというゴールを設定したが、年度内に旅行雑誌を作成する活動まで進めることができず、次年度の活動へ持ち越すことになった。2年間を通じて単元を設定するようなカリキュラム・マネジメントは場合によって必要だが、生徒の思考の流れや意識の継続を考えると、自分たちで見付けた魅力を伝えたいという思いや願いが高まっている状態で雑誌を制作する方が単元の流れとしてはより主体的な姿につながったと考えられる。単元を中心となる活動を思い描いた際に、その活動が充実するには、教師が年間の見通しをもって単元を構成する必要がある。せっかく生徒が「自分たちで旅行雑誌づくりたい」「魅力を発信したい」という思いや願いをもって、その実現に向けて活動する十分な時間を確保していないと、活動に対する充足感や達成感が得られる活動にならない。また、旅行雑誌を制作する活動においては、実際の場所に繰り返し行くという体験活動が必要不可欠である。解説においても、「総合的な学習の時間においては、間接的な二次情報も必要であるが、より優先すべきは、実際に触れたり、実際に行ったりするなどの直接体験であることは言うまでもない」と示されている。本研究での授業実践では、魅力を調べる活動においては繰り返し対象に関わる体験活動の時間まで見通した単元構成ができなかった。今後は、生徒の思いや願いを実現するために必要な時間を十分に確保して、余裕をもった単元計画をすることができるようにしていかなければならない。そのためには、単元を中心となる活動を思い描く際に、そこに至るまでの道筋を教師が見通し、生徒が設定した課題に対して十分に時間をかけて探究的な学習（課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ表現を発展的に繰り返す学習）に取り組めるような単元計画をすることが大切である。

最後に、研究を進めるに当たり、研究をご支援いただきました研究員所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼を申し上げます。

### 【参考文献】

文部科学省『(中学校編) 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた探究的な学習の充実とカリキュラム・マネジメントの実現』 2022年